

### 三長吉

附 載叔倫・無可・董島・姚合・李益

「李長吉」といえば、わたしたちには反射的に、唐代の後期に河南嵩谷に家居し、艱愈にその鬼才をたたえられた詩人の李賀、字は長吉のことだと考へる。ところが、その李賀とほぼ同時代に、「李賀長吉」なるひとがあり、「李長吉」なる人がいる。この三長吉は、同一人なのか、二人なのか、あるいは三人なのか。

そんなことはどうでもよいではないか、といつてしまえばそれまでだ。李賀そのものが、いまの日本では人々には馴染がない。持ち出すわたしの方が間が抜けている。それを承知であえて持ち出るのは、かれは世界の文学史に仕掛けられた时限爆弾で、その爆発の時期が遠くないような気が、わたしにはする。だのに仕掛けた場所さえあやふやで、危なっかしくて仕方がない。天が落ちて来はせめかと言ひ篠した杞の國の人みたいだけれど、李賀は、その天を射ようと企んだ男なのだ。

「李」は、中國に張三李四という言葉があるほどで、わが国なら、田中や中村といった、ありふれた姓だ。「筆」もまた、フランスのポールやジャンほどではないにしろ、珍しい名ではない。

い。たとえば、周賀、程賀。そうして字は、名と意味の共通したものが選ばれる習わしである。「賀」にたいする「長吉」は、自然で、選ばれる確率が高いといってよい。それならば、古い中国に、同姓・同名・同字の李賀長吉がいて、不思議でない。

詠の中でもぎられるのを避けるため、通俗の李賀を長吉A、さかの「李賀長吉」を長吉B、「李長吉」と長吉C、ときめておく。

## 二

白樂天と同時に進士に及第した戴叔倫は大分先輩にあたるが「冬日、李賀長吉を懐ふ」と有りと題する五言律詩があり、「情人我が恩おんを動かす」と李賀を情人と呼んで、なつかしさを表明している。賀が自己の内に閉じこもった孤独な人間とばかりは言えないだろう。

斎藤胸『李賀』、すなわち斎藤注の15ページに見える説である。戴氏のいう李賀長吉が長吉Bだが、斎藤注は長吉Aに関する書だから、古のことは、A・Bを同一人としたうえでの発言であることは、疑いようがない。戴氏のその詩「冬日育蠶李賀長吉」は全唐詩によれば次の通り。

歳既蕭寥寂  
歲の暮れ 部屋は ひつぞり

情人動我思

每因一尊酒

重和百篇詩

月冷猿啼慘

天高雁去遲

夜郎流落久

何日是歸期

なつかしい人がわたしの思いをけり動かす

一樽の酒を汲もうといつては

百篇もの詩を唱和したものだ

月冷やかに猿の音くこえ惨ましく

天高く雁のたよりの遅いこと

夜郎の地に落ちぶれて久しくなつた

いつになつたら帰れることか

吉田の詩集 第三 14325

この詩の作られたのが、戴氏の夜郎に流落していたある年の暮であることはわかる。ではそれはいつか、これを明らかにするには戴氏の経歴を知らねばならぬ。

斎藤注は「白率天と同時に道士に及第した戴叔倫」とし、率天・白率易の道士及第は、唐の第九代皇帝徳宗の貞元十六年ハ。である。長吉Aは貞元七年生れと推定され、十六年には十歳だ。五代の王走保の『唐摭言』や、『新唐書』には、長吉Aが七歳の年、韃靼や皇甫湜と交渉をもつたと記す。これらのことが事實ならば、戴氏と長吉Aとの間に交遊があり長吉A・Bが同一人である可能性が生じる。

長吉Aが七歳で韃靼に見出されたといふ伝えは、清の馮浩の『樊南文集詳注』などがすでに疑っている。

戴叔倫について、全唐詩に收めるその詩三百首、『全唐文』に收めるその文二百、唐の權德  
輿の書いた墓誌銘、『新唐書』、元の辛文房の『唐才子傳』が伝記資料の主なもので、詞華集や  
詩話のたぐいに關係記事が散見する。

これらの資料で進士及第にふれるのは『唐才子傳』だけである。

叔倫、字は幼公、潤州金壇の人である。……貞元十六年、試験官陳權のもとで及第した進士  
である。……次第に昇進して撫州の刺史にうつり、……その地の人民は善政を楽しんだ。……  
天子はかれを表彰し、謙郡男爵とし、紫の金魚符を与えた。のち容管経略使にうつり、權威  
名声はいよいよあがり、……徳宗は「中和節の詩」を賦し、使者を遣わしてかれに賜った。  
かれは上表して官吏をやめ道士となりたいと請うたが、まもなく逝去した。……卷五

徳宗の治世は貞元二十一年正月までで、その十六年からは六年にすぎない。進士及第者の初任  
時の仕官は從九品、県男爵へ古の文に「郡」とするのは誤り一は從五品である。皇族や外戚なら  
ともかく、普通は二年か三年たって一階あがるのだから、叔倫がいくら優秀な官僚だったとしても  
この榮達は異常である。『唐才子傳』は貴重な文献だが、いくらかの誤りを含む。この記事も  
さうに検討しなければならぬ。

『新唐書』卷一百四十三に叔倫の伝を、官歴については『唐才子傳』より詳しく、卒年五

十八と記す。ただそれが貞元何年であったかはわからぬ。けれども、徳宗が「中和節の詩」を賜うことと両記事において一致する。

全唐詩に徳宗皇帝の作十五首を收め、うち三首は中和節の詩である。そのひとつ「中和節に羣臣に宴を賜い七韻を賦す」に注していう。「貞元五年に初めて中和節をやだめ、帝は詩を作られ、その写本を容州にいる戴叔倫に賜うた」<sup>180</sup>『唐詩紀事』卷二ではこの詩の題を「正元五年初置中和節帝製詩寫本賜戴叔倫容州詩」とする。さきの「貞元」をここで「正元」とするのは編者の宋の計有功が仁宗皇帝の名の「頃」と音の通することをばかめたためである。全唐詩の題は他の本により、紀事の題を注にとりいれたのだろうか。

徳宗の詩を下賜されて間もなく死んだ、という点では『唐才子伝』と『新唐書』に一致する。その下賜が紀事などのいうように貞元五年ならば、叔倫の死もその年であろう。もしこれが正しいならば『唐才子伝』のいう貞元十六年進士及第は誤りである。貞元五年に死んだ戴叔倫が、貞元七年に生れる長吉Aに詩を贈る一事も、ありえまい。あるいは紀事などのいう下賜の年が誤っているのか。

戴叔倫には幸い同時代の權德興が書いた墓誌銘がのこっている。『權載之文集』<sup>181</sup>卷二十四に收める「唐故朝散大夫使持節都督容州諸軍事守容州刺史兼侍御史充本管經略招討處置等使謫縣開國男賜紫金魚袋戴公墓誌銘并序」がそれである。序にいう。

一の貞元五年夏四月、容州刺史・経畧使・侍御史・譙県男爵の載どのは、任地に到着されて三月めであったが、病氣のため交代し、車を驅駒から返し、六月甲申の日、清遠峠にやどり冕去された。明年正月庚申の日、金壇の玉京廟の家墓に返葬した。……湖南・河南の留後となり、秘書正字から三転して監察御史にいたり、湖南・江西の上級補佐となり、大理司直から再転して尚書祠部郎中にいた。東陽ではまる一年、撫州では三年、容州では数ヶ月十一の官職を歴任されたが、雲安での一ノにはその數に入れていない。 \* とし五十八。

貞元五年<sup>セハニ</sup>に五十八歳で死んだのならば、生れたのは玄宗の開元二十年<sup>セミニ</sup>である。唐代では一官に三年在任するのが大体の例であったようだから、三十初任として五十八歳までの二十九年間に十一官歴任ならば、ほぼ妥当など<sup>ハシメ</sup>であろう。徳宗に仕えた期間は四十八歳からの十一年。これならば『新唐書』『唐オ子伝』に描く天子の優待にも不似合ではない年配である。

岑仲勉『唐史餘論』卷二、徳宗、「載叔倫貞元進士」の条にも『唐オ子伝』の叔倫貞元十六年進士及第説を崔氏の墓誌によって訂正し、かつ、進士科出身かどうかも疑わしいといい、『兩浙金石志』二にのせる陸長源の「載公去思頌」の「建中元年……夏五月壬辰の日、詔書により監察御史裏行の載叔倫を東陽の令とされた」という記事を引いて、正史に缺け墓誌が概括した事項を補っている。建中元年<sup>セハ</sup>は貞元年<sup>セハニ</sup>の前五年である。

なお載叔倫の行で年次の明らかなものは「建中癸亥歲奉天除夜宿武當山北茅平村」14391 と「建

林序「全唐文卷五百」の二つ。建中の癸亥歳は四年ナミであり、「意林序」には貞元二年セハニ五月二十一日の日付がはいっている。

さて、以上によつて、載叔倫は貞元五年六月に死んだ二ことがはつきりした。かれと、貞元七年に生れた長吉Aとの間に、交遊が結ばれようわけがない。従つて斎藤注の兩人の文遊に関する説は誤りということになる。

もつとも、二の誤りは、斎藤注だけが犯しているのではない。清の王琦の『李長吉歌詩章解』すなわち王注の箇巻に載氏のこの詩を引くのは、何の説明もないけれども、長吉A・Bを同一と見たことによるのは明らかである。近ごろ出た陳弘治『李長吉歌詩校釋』すなわち陳訛・が附録二：題詠五則にやはりこの詩を引くのは、検討を怠つて王注の過誤を踏襲するものであろう。王琦は、わたしたちが見る資料を利用することができなかつたかもしれぬ。それならば王氏の場合過誤とはいえぬ。むしろ王琦が夢にも見ることのむつかしかつた文献を開発提示された先人の努力と、その学思をこうじる今のわたしの幸福を思うべきである。

長吉Aと長吉Bがまったく別人であることはわかつた。では長吉Bはいかなる人か。その問題は、長吉Cとかかわりがありそうで、Cの方からせめてゆく方がBのことも早く目鼻がつきそうである。無可の「李長吉が東井に赴仕するのを送る」送李長吉之任東井の長吉がそのCである。

江盤棧轉蘆 江はまがりくわり棧道にはてんで人気もないだろう

候吏拜行車  
家世維城後  
官算率邑初  
市錢黃精賣  
田歸白雲鉏  
萬里千山路  
何因欲寄書

けれどもやがて役人が車を出迎えにやってくる  
あなたの家柄は皇族の子孫  
官僚の資格をもちいまや邑を治める立場につかれる  
市では小牛がいゝぱい売買され  
田は雲のたなびくあたりまでよく耕されるにちがいない  
だがそこは万里千山のかなた  
どうすれば手紙がさしあげられようか

44408

東井がいまのどーにあたるのか知らないが、僻遠の小県であるうことは詩によつて察せられる。  
小県ではあっても、長吉Cは県令となつて赴任するのである。

わたしたちの知つてゐる長吉Aは、官は初任が奉札郎で、それきりだつた。一段上の協律郎になつたという人もいるが、その誤りであることは、すでに人もいい、わたしもいつた。もし長吉A・Cが同一人ならば、この詩は從宋の李商隱の缺を補う重要な資料だ。けれども、長吉Aの作品には、かれが県令になつた証跡はまゝたく無く、沈亞之・沈述師などかれの親友はもとより、かれの姉に直接に話を聞いて小伝を書いた李商隱も、そのことには触れない。かれの父李晉肅は四十歳をすぎてなお県令であった。そのことは拙稿「負薪」で考証した。二十代で県令になつたら當時としては榮進である。それで不遇をかこつては、人は笑うのみであろう。どうも長吉Cは

長吉 A と同じ人とは認めにくい。それならば、長吉 B とはどうだろうか。

長吉 B は戴叔倫の詩に名の見える人だった。同じ戴氏の詩に「無可上人の旁に宿つて」「宿無可上入房、がある。

偶來人境外　ふとやゝて来たのは世間の外  
何處染翼鷗　わすらわしさは何處にもない  
倘許棲林下　この林中に住めますなう  
僧中老此身　晩年を坊さんたちと過ごしたい

14460

長吉 B 一戴叔倫一無可一長吉 C、この結びつきを見ると、長吉 B・C こそ同一人と考えたくなる。しかし、李賀長吉すら別人であつた例をすでに見てているわたしたちは、ここでも單のみこみは避けて、できるだけ駄目おじしておかねばならぬ。無可あるいは無可上人といわれる人はただ一人しかいなかつたのか。戴氏のうたつた無可と、長吉 C を迷つた無可とは異して同人であつたのか。ここでも仮に前者を無可甲とし、後者を無可乙としておこう。

戴氏が無可甲の房を訪うたのは、詩應から察してその晩年であつたことは明らかである。いま五十歳から死の年の五十八歳をとつてみると、それは徳宗の建中二年七八一から貞元五年七八九までである。当時無可甲が何歳であったかわからぬ。かなりの年配であるように感じじるが、無可こと

考え方をさせる都合上、できるだけ苦く見つめることにする。それでも、十代とは考えにくから、二十歳とあててみる。すると無可甲の生年は、南京の壬辰元年セキニから代宗の大曆五年ハヂノまでの一間ということになる。

「次に無可乙」。『唐才子伝』卷六にいう。

無可は長安の人で高僧だ。世俗的な才能としては（あるいは、先祖代々、か）詩が上手で、多くは五言の詩をつくった。初め、賈島が僧だった時、青龍寺に同居し、賈島を従兄と呼んでいた。馬戴・姚合・厲元とよく唱和した。

全唐詩に「無可是范陽の人で、姓は賈氏、賈島の従弟で、天仙寺に居り、詩人としての名声は賈島どなれば」という。前半の記述は、賈島の伝に合わせたのであろう。『新唐書』卷一百七十六の贊愈の伝に附載する賈島の伝によれば、島は諱名を無本といい、贊愈に詩才を見出され、やの勤めて還俗し、官吏となつたが不遇で、会昌の初めに死んだ。年は六十五だった、という。会昌は武宗皇帝の年号で、その元年は八四一年。任仲衡『唐集解疑』（『唐人行第錄外三種』所收）の「賈島癸卯及其卒歿」で、蘇軾の「唐故司倉參軍賈公夢銘」の「会昌癸亥の歲七月二十八日に郡の寺舎でみがつた。とし六十と五」とあるのを考証支持している。癸亥は会昌三年である。されば賈島の生年は大曆十四年セキノである。無可乙が賈島の従弟で年少ならば、その生年

は大曆十四年以後である。大曆十四年以後に生れる無可乙は、大曆五年以前に生れている無可甲とは、同じ人ではありえない。

無可甲・乙が別人であることがわかつたから、長吉B・Cが同一人でないと断定できるかといふと、それはいかない。戴叔倫から詩を贈られたときの長吉Bがまだ若く、以後長命であったとすれば、戴氏とはかわりのない無可乙との間に交遊のひらけることも考えうるからである。その点を検討するためには無可乙の生年をできるだけ追究しなければならぬ。

無可乙が姚合と親しかったことは、さきに引いた『唐才子伝』の記事に見え、ふたりの集に互に應酬する作があるので確かめられる。姚合の作に「無可上人の越に旅行されるのを聞いて」「無可上人遊越」がある。

清晨相訪立門前  
麻履方袍一少年  
嬾讀經文求作佛  
願攻詩句覓昇仙  
芳春山影花蓮寺  
獨夜潮聲月滿船  
今日旣行偏惜別

すがしい朝  
わたしを訪うて門前に立たれたのは  
麻の草履に袈裟をつけた 一人の少年  
嬾讀經文求作佛  
願攻詩句覓昇仙  
芳春山影花蓮寺  
獨夜潮聲月滿船  
今日旣行偏惜別

儒学の經文を読むのはめんどくさいが 仏にはなりたく  
いい詩句をつくって 仙境に昇りたいという

春の山を背景に 花は寺につらなり

ひとり旅する夜 月かけは船に満ちることだろう

今日 お送りするのは 借別にたえなければど

どうやう二人は、いつはじめて出会い、またたま別れたが、以後の交遊の端緒となつたのであらう。「少耳」といふ二ノ山からすれば、無可はまだ二十歳にもならず、姚命よりはあるかに年少だ、たのである。金匱詩の注に、題を一本では「無可が越州に住もうとするのを遡る」「送無可住越州とする」といっているのは注目に値する。姚命は、この日はじめて会つた年少の體に与えた詩をノートに記すとき、「無可が……」と書いたが、後年、詩集を續むとき、すでに高僧になつているかれを尊重して「無可上人が……」と敬稱をそえた、とも考えられるからである。宋の晁公武の『郡齋讀畫志』によれば、元和十一年ハニの進士で、武功県の主簿などを歴任し、開成の末に秘書監で終つたといふ。姚命に「武功県中の作、三十首」武功県中作三十首があり、その第二十四首26548に「いつまで待つても道絶せず……年は四十を越えたのに」「一官無限日……年未四十餘の句がみえる。一官三年がほほ当時の例であつたらしいが、「いつまで待つても」というところからすれば、ハニとさすでに五六六年たつていたのかもしれない。されば、進士及第の元和十一年には三十五歳前後とみてよいであろう。それならば、生れたのは唐中二年六月三日であり、晉廟より二、三歳年少だったわけである。

やがてのべたように、無可乙は姚命よりはるかに年少だったらしいが、かりに七八歳若かったとする、慶元五年六月。年の出れとなり、戴叔倫が長吉Bに詩を与えた年にほぼ当り、長吉

Aの生れる貞元七年<sup>セイモンセキ</sup>に一、二年先んじる。

無可乙が長吉Cにおくった詩の作時は、姚命と無可乙ことが出会ったころからそれ以後であり、それは無可乙の十七、八歳以後であろう。それ以前は師のもとの修行中であろうから、世俗の人との詩文の交わりは許されなかつたはずである。この推測があやまつていなければ、その詩の作時は元和三年<sup>エイワサン</sup>（四〇九）年以後ということになろう。

いま元和四年といふ時刻でながめてみると、長吉Aは十九歳で河南府試を受けるかどうか、といった状況の中にある。

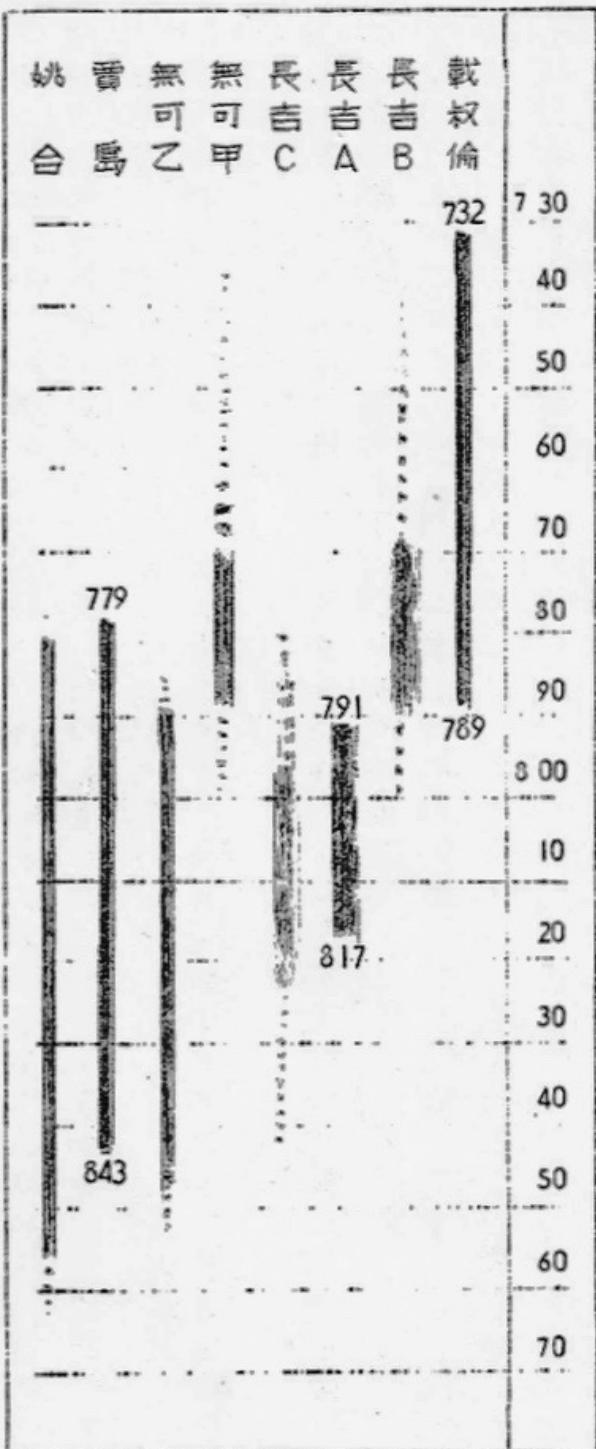
長吉Bはどう若く見つもつても四十歳であり、戴叔倫との交情から察すれば、もしろ五十歳から六十歳の間ではないかと考えるほうが自然である。

ところで無可乙がおくった詩の「官賃率昌初」の句は、灰白の髪をいただいてはじめて任につく老知県にはそぐわず、他の人たちよりは若くしてその職を与えられた少壯県令にこそふさわしいのではないか。それならこのとき詩をおくれた長吉Cは三十から三十五ぐらいまでの年配であつたろう。

無可乙が長吉Cにおくった詩の作時はわからない。元和四年より後になるほど、長吉Cの年配は、長吉Aに近づき、長吉Bから遠ざかる。

長吉Aに近づくといつても、長吉Aは二十歳前後に舉礼郎になり三年つとめ、家にかえり、滋賀の張徹をたよってやへてほほ三年すゞしたといつて十六歳で死んだことがわかっている。もし

長吉 A・B が同一人とするならば、長吉 A は二十六歳か七歳で県令となつたことになる。進士科の受験を断念したと思われる長吉 A が、進士科出身者でもあまりえらわれこの昇進数の異論をしていただろうか。官吏社会に生きるものにとっては大きいその榮誉を、長吉 A について語るその友のやけり官吏である人たちが、なぜひとことも触れないのか。長吉 A にはそのような昇進はなかつた、すなわち長吉 A・B は別人であつたとすべきであろう。



長吉 A・B・C が同一人でなく、それぞれ別の三人であることがわかると、次に起つてくるのは、三人についての混同がすでに当時、もしくは近い時代に起つていなかつたかどうか、その混同によつて作品の混同が起らなかつたかどうか、世人の長吉に対する批評が混同しなかつたかどうか、といつた問題が生じる。わたしは、混同が起つていた、と考える。三人は、ほとんど同時代の詩人で、A と B とは、氏・名・字がまったく同じであり、C の「長吉」が名か字かは断定できぬが、字だとすれば、A と C は氏と字が一致するうえ、いずれも唐の皇族の子孫である。混同が起つて不思議ではない。

『旧唐書』<sup>カウタウシキ</sup> 李益の伝に、益は「歌詩を作ることに長じ、貞元末に皇族の李賀と名前がひとしく、一篇を作る」とに樂園の人たちが謝礼をたずさえて求めに來た」といふ『新唐書』<sup>シンタウシキ</sup> にもほどんど同じ記事がある。「こゝでながらこの李益と同時代に別人の李益がありこの人は散文にたくみだつたので「文體の李益」といつて区別したと『新唐書』に記す。

興元二十一耳には、長吉 A は十五の少年にすぎないが、李益はすでに五十六歳であつた。李益の年は李仲勉『唐史餘藻』<sup>カウジヨウツク</sup> 遷京「舊參麻州李端公序」による。長吉 A がいくつ早熟の鬼才であつたにしても、すでに老人といつてよい高官と名をいとくじたといふのは、おかしくはないか。長吉 A にとっては名譽であろうが、李益にとってはどうか。ことに李益は嫉妬心が強くて酷などころのある人だつたといふ。李益の自尊心を傷つけるおそれのある評判を人たちが言いはやしたからどうか、それをひそへしたという事実が、長吉 B ならば、さほど年齢はへだたらず、世間も、評

判の主の尊謙も西をやばだたせん」とはなかつたださう。長吉Aにかげに演説してしまつたよつた長吉Bが、それほどの有名人であつたはずがない、という反論も出るかも知れぬが、それは長い時間がふるいにかけた後の代にしる者からみてのことで、時代の流行の渦巻く中での評判とは別のことである。併しに今日の国文學専攻の学生で樋口一葉の名を知らぬ者は少ない（無いとは言いかねるが）にしても、やはり葉と庇護した半井桃水が天下の子女を熱狂させた流行作家であつたことを見る者がどれだけあれどか。森鷗外と同時の文人にやはり鷗外なる人がいたことなどこれまで特殊な研究者・好事家の周囲でしか問題にされていまい。

新・旧『詔書』はともに歌詔樂工・即ち高麗樂団の音樂家たちが、長吉Aの樂府數十篇を作曲演奏した、という、ところが、かれの親友のひとり沈亞之の「詩に序して李賀秀ヤを送ル」<sup>沈下質文集卷九</sup>に、「惜しき」に、かれの樂府は「いに作曲し樂器にのせて歌われることがなかつた」という、この矛盾を宋の王灼が『鶴林漫志』で掲載し、沈亞之の詔書を誤つてゐる。

歌詔Aの作で「曲胡子詔書」<sup>2029(校本085)</sup>と「花音曲」<sup>20793(校本148)</sup>が作曲詔題されたところに曲序じつて明らかである。これ外「緑水辭」<sup>\*</sup>が後代の歌謡に詔題としているので、琴曲として作曲ヤ、これだ「こと」がわかるが、他の作についてにはわからない。  
\* 20833(校本189)

かれの作が「たゞ歌謡や、やなからといえば、事實に反する。しかし、数十首が作曲されても曲中でも演奏された、ところとは、素直に信じつかるものではない。わたしは拙稿「尊長吉」<sup>\*註</sup>で「此節のエスアリが音樂の方向を指している」とこつた。かれの讀せんぐく部にすでに

音楽を包摂している。それは音楽の方からいえば、外からかれの詩に参与する余地がない、ということになる。

かれの詩で作曲された「一」の確かな前記三首をもう一度検討してみよう。これらはいずれも欠落を含んで、詩としては完結していない感じが強い。中では「花遊曲」が最もまとまっているが、それでも、各句の凝結度と相互の牽引度は高いとはいえない。そのことは、たとえばほぼ同じ時季をうたった「十二月樂辞 三月」20670(※外026)と読みくらべてみれば、ただちに納得されるだろ。このような欠落ないし弛緩は、注家や評家によつて、長吉Aの未熟とされることが多かつた。だが、「一」の三首のうち二首は、作曲されることを前提として作詞し、しかも作曲者の才能・特徴を知つた上、かれ自身が作曲に参与している。つまり、これらの詩は、音楽が外から参与しうる場所を、詩としては欠落ないし弛緩とみえるよう刀形で、作者の長吉が設定した作品ではないか。小説はそのまま劇の台本とはならぬ、日本は、大道具・小道具・能優の表情やしぐさを容れる余地をつくっておかねばならぬ。かれの三首はそのような性格の作品なのだ。だが、「一」のような作品はかれの集に數十首もかぞえることはできぬ、かれの作の多くは、音楽に参与を許さぬほどに音樂的だ。

「一」のことは、かれと名声をひとしくしたといわれる李益の作品と比較すると、いよいよ明瞭になつてくる。当時、天下の人々に歌謡されたという「夜 妻隔城に上つて 曲を聞く」

回樂峰前沙似雪  
受降城下月如霜  
不知何處吹蘆管  
一夜征人盡望鄉

回樂峰前沙  
雪に似たり  
受降城下月  
霜の如し  
知らず何れの  
外か蘆管あしはえを吹く  
一夜征人盡  
盡く望鄉す

たいへんうまい作である。ところで、よく見ると、沙似雪や月如霜はすでに盛唐の詩人たちにさんざん使い古された直喻であり、転・結二句もさほど獨創的なものではない。直喻の平凡は、それぞれの上にくる地名の特殊性を強調するための対応ともいえるが、非常にぴったりした回樂峰や受降城の名も、いす、やはり当時の中國人に異國的にひびいたであろう中央アジアの地名、たとえば、祁連峰・居延城または火燄峰・輪台、城にとりかえても、韻律さえ合えば、さして不都合ではない。つまりこの詩は、よみかえ自在の一般性をそなえている。そして、編曲の仕方によっては、ブルースにでもジャズにでもなる可塑性——つまり相当にはびらく音樂に聞きを許すところがある。本質的にはいまの歌謡曲の歌詞と同じ非個性的・非結晶的・非音樂的な詩なのである。それが、この詩の爆發的人気を獲得した理由といえるであろう。また天下の人々へおそらく幾通りもの曲をつけて歌唱された理由であろう。

樂府はもと音樂に合わせる歌詩であった。それがいつたん衰え、唐代にふたたび盛んに製作されろようになつた。しかし、そのことからただちに唐の樂府が作曲され歌唱されたと考えてけな